

回顧録 英語に会えて

同窓会会員：山田 和嘉子

投稿日：2015年2月22日

私の生れは、東京都江戸川区の下町です。

事の始まりは、小学5年生の時に大田区のレベルの高い公立小学校に転校した時なのです。獅子頭のような顔をした背の高い女の子に突然「アンタ、アンタつて言わないでよ！だから下町っ子は嫌い！！」と激しくののしられ唖然としました。

その後友達を取り上げられた私は、次第に心を閉ざして無口になり無気力な小学生生活2年間を送る事になってしまったのです。そして中程度の成績だったのが、みるみる落ちて両親を心配させました。

公立中学校に入学する際に父から「英語は皆が同じスタートラインに立つから頑張ってみろ！」と励まされたそれ以来、目が覚めたように英語は勿論の事、他の教科の勉強にも力が入るようになり徐々に成績は上がって行きました。

高校では、スポーツと勉学を我武者羅に励むうちに成績は大変良くなり、大学で英語を勉強したいと強く思うようになり両親に願出しました。

すると父が給与明細を私の目前に広げて、家を建てるためのローン計画の説明をし出したのです。要は、就職して少し援助して欲しいというものでした。

長女の私はやむを得ず進学を断念して両親の要望に応えたのです。

しかし、英語だけは諦めきれず勤めながら語学学校に通い続けることにしました。そんな時にアメリカの青年と知り合って交際をするようになりました。数年経った頃、結婚願望が高まったので両親に打ち明けましたところ、断固反対されてしまったのです。もっとも当時は国際結婚など論外でしたので、両親の答えは当然の成り行きだったのかも知れません。諸事情考え併せて拙い英語で彼と話し合った結果、泣く泣く結婚を諦めることにしたのです。

その後、現在の夫と結婚して10年くらい経った頃でしょうか、ある言語教育センターの新聞広告「チューター募集」が目にとまり、英語を諦めきれずにいた私は飛びつきました。すぐに夫の了承を得ようと相談した処、「NO!」と大反対されました。

またもや諦めるのは耐えがたく、同居していた主人の両親に相談してみたのです、明治生まれの両親は「貴女がやりたいと思っているのなら、子育てが楽になってからなどと考

えないですぐにやりなさい。小守ぐらいは出来るから」と思ってもみなかった嬉しい言葉を掛けてくれたのです。私はその言葉に力を借りて、反対する夫に逆らって研修を受ける事にしました。

チューターの仕事は英日で語られる物語テープを子どもたちに聞かせて、物語の表現活動を通して子どもの心を開き、多様な人格を育てるという責任重大なものでした。そして物語に関わる専門知識が必要な時は、その分野の著名な方々の講義を聞き子どもたちと一緒に学ぶのです。

私たちの指導者は詩人の谷川雁氏で、氏の人脈を生かして動物学者の小原秀雄氏、元、気象学者の根本順吉氏、C. Wニコル氏ほか音楽、絵画、朗読、舞踏などの分野の方々を招いて下さり、その方々の講義を聞いて刺激を受けました。

動物学者の小原秀雄氏のレクチャーでは小学4年生の男の子が「僕大きくなったら動物学者になりたい!」と興奮した口調で感想を述べていた光景は忘れる事が出来ません。プロの講義の迫力は大人をも興奮させるのですからもっともな事でしたが・・・。

教育センターが企画する音楽や絵画、朗読などのイベントに子どもたちを連れていくのも、春、夏のキャンプや合宿に参加させて連れて行くのもチューターの仕事。

キャンプ、合宿は関東以西から九州北部までの同じ活動をしている子供たち100～200人ぐらいが一堂に会して縦長グループを作り、日頃の学びや遊び、生活を共にしてリーダーシップや協調性や発想力、想像力等鍛えます。そのお世話をする役目は当然なのですが、未熟な私には荷の重い事ばかり!でもその荷物を負いつけているうちに子どもたちと一緒に私も少しは成長させてもらいました。

話がチューター研修に戻りますが、英語力の乏しい私に果たして務まるものなのかと大変緊張して臨んだのですが、その内容は、英日の物語テープを聞いて自己表現を鍛えるカリキュラムだったのです。小学校で受けたいじめ以来、人前で発言したり表現したりが目立つ事が苦手だった私は、その場を逃げ出したい思いで一杯になり後悔しきりでした。そして現実は厳しく、どんなに隠れていようと容赦なく指名され60人ぐらいの参加者の前で表現させられました。恥ずかしい思い、泣きたくなるほどの辛い気持ちを必死でこらえて何とか研修を終えました。

次は教室を立ち上げなくてはなりません。これが半端でない苦勞でした。見ず知らずの家を訪問して活動内容を説明して生徒募集をしていくのですが、押し売り同然の扱いを受けて追い払われるのですから、自尊心が傷つきそれはそれで心が折れそうに

なりました。

どれほど頑張ったでしょうか。幼稚園の課外教室の担当と自宅に教室を立ち上げてスタートできたのです。しかしながら幼児～大学生対象の活動はあまりに大変で何度も挫折しそうになりました。でも、夫の反対を押し切って始めた事だし、両親の応援を無にして投げ出すわけにいかず、歯を食いしばって子どもたちの指導を続けました。

チューターを辞める5～6年前から指導者の谷川氏は、宮沢賢治の作品を子どもたちの育成のために取り上げる事にしたのです。氏は賢治の作品には万有学が込められているし、言葉の宝石が散りばめられているので英語でなく日本語を大切にしたいということで、日本語オンリーの物語テープ制作となりました。私にとって賢治の作品は難解な上に物語に込められているあらゆる物を人体を使って表現するという方向転換にたいそう戸惑いました。英語力を高めたいと始めたはずなのに、とんでもなく広くて深い難解な世界に飛び込む事になったのですから、身の丈以上の活動に青息吐息！！です。

わずか15年の経験でしたが、小学校時代のいじめの後遺症が何時までも続いて自信のなかった私が、子どもたちの指導を通して（成せば成る！）を会得したように思います。その一方で放送大学入学の為の基礎づくりもしてくれました。

英語に出会って、英語は私の中心を流れるダンスと共に大切な一つになっているのです。残念ながら英語力は高める事が出来ませんでした。其の想いは今尚、私の中で燻っています。そして（成せば成る）のエネルギーは、加齢と共に本当に小さくなりました。

これからは苦手な事には使わずに楽しい事だけに小さなエネルギーを使い続ける余生にしたいと考えているところです。

以上